

父の名代みようだい

武州の血洗島で養蚕・藍商・金融をいとなむ農家に生まれた栄一翁は、父である市郎右衛門から論語をはじめ学問の手ほどきをうけ、さらに七歳から当時十七歳であった尾高惇忠に師事し、さまざまな漢学・文学を学ぶとともに、剣道を習いました。物おぼえがよく、勉強熱心な栄一は、めきめき頭角をあらわしていきます。十四歳の時に父に申し付けられた藍葉の買い付けでは、農家が舌を巻く鑑定ぶりを見せました。

その栄一が十七歳のときのことです。栄一の住む村の領主は「安倍摂津守」という大名で、栄一の屋敷から八キロメートルほどのところに代官の陣屋を構えていました。村の有力者であった栄一の父、市郎右衛門は、同じ村の渋沢宗助とともに、たびたび領主のために御用金を課されていました。青年時代の栄一が生きた江戸時代では、江

戸幕府が定めた身分制度のもとで、武士は一番身分が高く、商業にたずさわる人は身分の低い者とされていました。百姓らは武士階級である領主へ年貢や御用金を納めることが当たり前とされていました。



その陣屋から市郎右衛門に呼出状がきました。

父親が病気で寝込んでいたので、栄一が父の名代として陣屋へいくことになりました。陣屋には宗

助も呼び出されていました。陣屋に着くと代官が二人の前にやってきて、いきなり、

「このたびは殿様のお姫様がお輿入れになるので、いろいろと物入りである。ついては、渋沢市郎右衛門、渋沢宗助、その方たちに御用金を申し付ける。」

というのです。代官のあまりの言い分に、栄一は思わず代官の顔をまじまじと見てしまいました。そんな様子の栄一にかまわず代官は、

「よいかな。渋沢宗助は一千両。渋沢市郎右衛門は五百両出すように。おめでたい御用金であるから、その方らにとつても大變に名誉あることである。ありがたくお受けするように。」

「ははあ。渋沢宗助、ありがたくお受けいたします。」

栄一は、下を向いたまま、しばらく返答ができないでいると代官は栄一に質問しました。

「市郎右衛門のところはどうじゃ。」

「私は、父の代わりに来た身であります。私は農業や商売のことを学んで参りましたが、五百両を得るのは簡単ではありません。大金のお話ですので帰宅し、父に申し伝えたうえでご返答いたします。」

と栄一ははっきりと述べました。栄一の返事を聞き終わるやいなや代官は、

「何を申すか、お主はお殿様にさからうのか。」

「私は、あくまで代理のものです。宗助は一家の当主ですが、私は当主ではありません。当主は市郎右衛門でございます。その市郎右衛門からは、お殿様のお考えを聞いてくるように申し付けられました。ですから、御用金について父に申し伝えたくえで、返答いたします。」

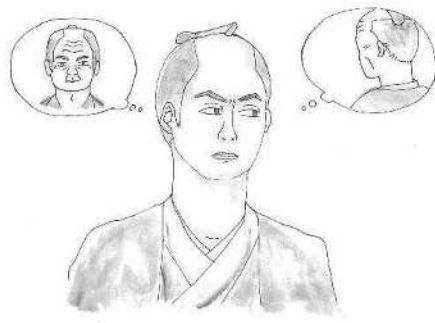
「栄一よ、おまえももう十七歳になるというではないか。十七歳にもなつて、これくらいのが決断できないとはなんと情けないことだ。当主の息子が判断できないとは、血洗島村の渋沢も落ちぶれたものだ。栄一よ、渋沢の名誉を守るためにも、おまえの名誉を高めるためにもこの場で御用金をお受けする返事をせい！」

それでも栄一は震えながら、同じ返事を繰り返しました。

「私は名代でありますので……。」

代官もついには根負けしてその場はそれで済みました。

最後まで固く自分の態度を崩さなかった栄一は、領主の屋敷おくからの帰り道、湧きおこるさまざまな思いを抑えることができませんでした。武士だけが特別な扱いを受けているが、それを笠に着ているような武士が世の中を治めることができる



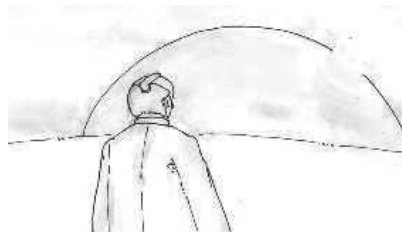
のだろうか。お金は大切なものなのに、その重みがわかっていない。お代官は、お前の名誉といったけれど、私の名誉とは何なのだろうか？ いったい、これらの世の中はどうなっていくのだろうか。

帰宅した栄一は父に代官とのやりとりを話しました。父は一通り栄一の話の聞くと栄一に言いました。

「それが『泣く子と地頭には勝てぬ』ということ

だ。栄一、明日、御用金を代官のいる陣屋に届けなさい。」

栄一は、何とも言えぬ気持ちになりました。しかしこのとき生まれた思いは渋沢栄一翁の胸に深く刻まれ、栄一翁の偉業を支えるものになったのです。



※代官：諸藩が治める土地の行政にあたる役人。

※陣屋：代官などの役人の詰め所。

※御用金：江戸時代、幕府・諸藩が資金を得るため、利息をつけて返済する約束で、町人・百姓に強制的に課した借入金。幕末には返済されないことも多かった。

大隈重信おおくましげのぶからの誘い

「渋沢くん、新政府に力を貸してほしい。大蔵省の役人になってくれないか。」

大隈重信からの強い要請ようせいでした。これからは、商業が大事だと考えていた栄一は、頭を抱え込んでしまいました。

一八六七年、およそ二六〇年続いた江戸幕府が滅び、武士が支配する世の中が終わりを告げました。そのころ、渋沢栄一は二十七歳、將軍

徳川慶喜よしのぶの弟、昭武あきたけが

ヨーロッパ諸国を見てまわるお供をしていました。

「ヨーロッパの進んだ技術とそれに伴う文明はなんて素晴らしいんだ！整備された上下水道、蒸気機関車、電灯やエレ



【渋沢史料館所蔵】

ベータなど最新の機械……。それに比べ日本は……。遅れている！いつこくも早く改革を進めなければ！」

栄一は見るものすべてが新しく、まるで別の世界に來たようでした。

しかし、ヨーロッパから戻ってきた栄一には仕えるべき幕府がありませんでした。幕府は新政府によつて倒され、かつて仕えていた徳川慶喜は静岡の宝台院ほうだいいんという寺院で軟禁状態でした。栄一は当時、静岡藩から勘定組かんじょうぐみになって欲しいと声をかけられましたが、役人就任を断わっていました。

「これからの時代はヨーロッパと同様に商業が重要になってくる！商業を發展させ、国を豊かにすればこそ、人々の生活が豊かになっていくのだ。」

そう思った栄一は、静岡で新しい事業を始めることにしました。

明治政府から借りた藩の資金に地元の豪商か



ない新しい試みでした。

そして、この会所はうまく行き、成功を収めていました。栄一は、「この商法会所のシステムが自然と各地に広がっていけば、日本全体の商業が新しくなっていくに違いない！」と、大きな希望を抱いていたのです。

ところがそんな時に突然、明治政府の中心人物であった大隈重信から仕官せよという呼び出し状が届いたのです。

栄一は、「なぜ私が呼ばれたのだろう。私は

ら募った出資を加え、商法会所という現代の会社のようなものを設立しました。これは農家に必要な資金を貸し出す「銀行」と、米や肥料などの売り買いを行う「商社」というふたつの役割を同時に果たす、これまでに

自分の一生を商法会所に費やす覚悟だ！自分にはやりたいことがある。それに、慶喜様のそばから離れるつもりはない。」と、考えていました。そこで、栄一は、大隈重信の自宅を訪ね直談判^{だんぱん}におよびました。

「私は新政府に仕える気はありません。租税の仕組みについても何も知りません。何の知識も経験もないのに、いきなり大蔵省の役人になれといわれても、到底無理です。」

すると大隈は、「きみは『^{やおよろず}八百万の神たち』という言葉を知っているか。」と栄一に問い、

「きみは租税の事を何も知らんというが、その点は、新政府に働く者はみな同じだ。財務の知識や経験のあるものは一人もおらん。すべてが、前例も手本もないのだ。わからん者同士が知恵を出し合ってこれから相談してやっていくしかない。だから、われわれみんなが八百万の神なのだ。君を、その神々の一柱として迎えたのだ。」

大隈は話を続けます。

「それに、きみが旧主慶喜公の恩義を忘れぬというのは、まことに素晴らしい。だが、僕に言わせれば、失礼ながら目の付け所が小さすぎる。」

「みんなが知恵を出し合って新しい日本をつくるのだから、少しでも知恵のある人に手伝ってもらいたい。」

大隈の説得に、栄一は、頭をかかえこんでしまいました。

宿に戻った栄一は、ヨーロッパ諸国で見たすばらしい光景と、自分の描く商業を盛んにすることと豊かになった日本の将来の姿を思い浮かべながら、繰り返し大隈重信の言葉を思い返していました。

その後、栄一は大隈の誘いを受け入れ、国づくりに邁進まいしんしていくのです。



創設けんいんしました。栄一は頭取になり、日本の経済を牽引けんいんしていく存在となったのです。

一八七三年五月に退官するまで栄一は、租税そぜいの正かみとして税制、貨幣などをととのえ、国家予算の制度を確立していきました。退官後は、商工業を盛んにするため、一八七三年六月に日本で最初の銀行、第一国立銀行を

令和二年三月 渋沢栄一翁ころざし読本編集協力委員会作成

その道に向かつて

「おい、今日こそ部活に出ろよ。」

逃げるように帰ろうとする僕に、修が声をかけてきた。修と一緒にラグビー部に入った、小学校からの友達だ。ラグビー部のキャプテンで、僕にいつも声をかけてくれる。

「慎司、もしかして、あの試合のミスはまだ気にしているのか。試合はチームワークだ。お前ひとりの責任じゃないんだぜ。」

「うん…。」

「おまえ、本当にいいのか、これで…。俺たちずっと一緒にラグビーをやってきただろう。これくらいのことで負けるなよ。」



僕の顔を少し見つめた後、修は校庭へ出て行った。修の後ろ姿を見送りながら、ため息をつい

た。修の気持ちにこたえられない自分が情けない。どうせ僕にはラグビーの実力なんてなかったんだから。

あの日の悪夢がよみがえる。二週間前のあの試合。今年は優勝できると躍進を続けた僕たちだった。しかし、優勝を目前にした決勝戦で僕はミスをした。あれだけ練習したのに、自分にはできなかった。自分にできることはやってきたつもりだ。こんなに頑張ってきたのに何の意味もなかった。

あの試合以来、部活から足が遠のいた。ラグビー部の練習を横目に、正門に向かつて歩いていると、後ろから呼び止められた。顧問の青木先生だった。

「今日も部活に参加しないのか。」

「あの…。もう、部活はやめようと思っています。いくら練習してもうまくならないし…。僕のせいで…。すみません。」

「慎司、何か勘違いしていないか。」

青木先生は心なしに強い口調で言った。僕は思

わず青木先生の顔を見た。

「ラグビーがどんなスポーツか、よく知っているだろう。今まで、どんな思いでラグビーをしてきたんだ。」と続けた。

僕はどきつとして、何か言わなくてはと思ったが、何も言えなかった。青木先生はさらに続けた。

「慎司の気持ちはわかる。俺も選手だった頃、なかなかうまくならないことに焦ったことがあった。チームのみんなに迷惑をかけたこともあった。もうラグビーをやめようかと思ったこともあった。その時だ、監督から教えてもらった言葉が渋沢栄一翁の『ただそれを知っただけでは上手くないかない。好きになればその道に向かって進む。もしそれを心から楽しむことが出来れば、いかなる困難にもくじけることなく進むことができるのだ』という言葉だ。慎司、知っているか。」

首を横に振る僕に、青木先生は優しい表情で話してくれた。

「栄一翁は数えきれない程の事業設立に関わり、



日本の経済の発展に力を尽くした人だ。その裏には、俺たちの想像を超えるような苦労や困難があっただろう。それはラグビーだって同じだ。この言葉のおかげで俺は、ラグビーともう一度向き合うことができた。ラグビーは、チームが一つになって互いに助け合いながら前へ進むというスポーツだ。自分がどれだけラグビーが好きかということに気づいた。そして、ラグビーの本当の楽しさもわかった。慎司は、ラグビーが好きか。」

「はい…。」

「好きなことをやっていても困難にはぶつかる。その困難をどう乗り越えるかが大切なことだと思う。その困難を乗り越えたときに、本当に好きだと言えるんじゃないかな。」

帰宅後、僕は近所のグラウンドに向かった。久

しぶりに蹴るボールの感触が何だか懐かしく思えた。色々な思いが、僕の心に広がってきた。時間が経つのも忘れてボールを蹴り続けた。

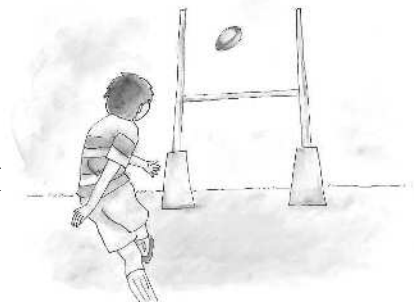
放課後は毎日、近所のグラウンドでボールを蹴った。そのたびに、青木先生の言葉や、これまでの練習や試合のことが思い出された。一週間ほど経ったある日、修たちがグラウンドの横を自転車で通りかかった。

「慎司、毎日ここで練習していたのか？」

「うん。」

「やっぱり、ラグビーから離れられないんだろう。本気でラグビーをやってきたんだろう。あの試合の後、負けた時の自分たちを超えられるように努力しようとみんなで話し合ったんだ。みんな努力しているんだ。一緒に、部活やろうぜ。戻ってこいよ。」

修の話を聞いて、チームのみんながそれぞれ頑張っていることを知った。みんな新しい目標に向けて努力しているんだ。自分のラグビーのこと、チームのこと、青木先生の言葉など色々なことが



僕の頭の中を駆け巡った。

翌日の放課後、修が僕の教室の前で待っていた。

「行こう。」

修はたった一言だけ言った。僕は修と一緒にグラウンドに向かった。久しぶりの仲間との練習は、時間があつという間に過ぎていった。

それからの部活は、集中して練習に取り組むことができた。今までとは違う思いが僕の中に生まれた。やっぱり僕はラグビーが好きなんだと思った。

今日も僕は、ラグビーボールを夢中になって追いかけている。僕の蹴ったボールが大きな弧を描いて飛んでいった。

自分を変えたもの

「ピッピー！」この笛の音で私の三年間の部活動は終わった。バレーボール部員として大好きな部活動に一生懸命取り組んできた。名残惜しいような、まだ部活動をやめたくないような複雑な思いもある。三年間にはいろいろなことがあった。楽しくて仕方がない日々があった。部活動から逃げ出したくなる日もあった。今、私の心の中には新たな大きな目標がある。近くの高校への進学希望だ。高校に進学して、将来は商業に関する資格を取り、ゆくゆくは自分のお店を持ちたいと考えている。今はまだ夢のような話だが、こんな風に考えるようになったのは、二年生の終わりの、あるできごとがきっかけだ。

その頃の私は部活中心の日々を過ごしていた。運動は得意で自信もあった。私は二年生ながら三年生に混ざってレギュラーとして試合にも出ていた。しかし、ある時突然レギュラーをはずされてしまった。納得のいかない私に顧問の先生は、「なぜレギュラ

ーをはずされたかわかるか？ おまえは確かに運動神経がいい。技術も優れている。しかし、おまえの個人プレーは団体競技では必要ないんだ。その意味を考えてみる。」と言って、それ以上何も話してはくれなかった。

その日、家に帰った私は父に怒りをぶつけた。

「なんで私がレギュラーをはずされるの。実力じゃ負けていないし、勝った試合だって私の活躍があったからでしょう。私の代わりにレギュラーに入った典子なんか全然下手じゃない。次の試合は負ければいいんだ。私のありがたみがわかるんじゃない。」

「本当にそうかな……。」

ちゃんと理由があるんじゃないか。」

いつもは素直に聞くことができる父の言葉も、その時は、耳に入らなかった。



その後も状況は変わらなかった。なんだか典子がどんどんうまくなっていくように感じた。私は部活に出るのもいやになってしまい、練習も休みがちになっていった。



そんなある日、その日も私は適当な理由を友達に頼んで、部活には出ずに教室でぐずぐずとしていた。もう部活が終わる頃だろうと思いつつ、ふと体育館の方へ目を向けたとき、そこに典子の姿が見えた。典子は一人で体育館の入り口を掃いていた。なんだかとても念入りに、隅の方まで掃いていて、そのうち入り口のマットをどけて床を拭きだした。その姿を見た私は、何か心がチクツと刺さったような気がした。プレーの技を磨くことは誰にも負けずに努力してきたといえる。でも、いつも自分のことばかり

り考え、仲間やチームのことなど考えたことはあつたろうか。心の中にもやもやしたものを感じながら下校した。

二、三日した日の夜、一緒にテレビを見ていた父がふと、「人は自分の思い通りにならないときこそ本当の姿が見えるんだな。」と言った。そして私をじつと見つめ、「おまえは最近、部活動に身が入ってないみたいだな。この前、くわしいことは聞かなかったが、なぜ自分の思うようにいかないのかじつくりと考えてみたのか。」と言った。

言葉につまる私に、

『自分のための努力だけでは幸福になれない。』
「お翁の言葉だけど、聞いたことがあるか？」と言った。



「洪沢栄一翁のことは小学校の頃から、知っていたが、その言葉は知らなかった。さらに父は、

「この言葉の意味、自分に置き換えて考えてみたらどうだ？」と続けた。

私はその夜、一人になって改めて考えてみた。いろいろなことが頭の中をぐるぐると駆け回っていた。今まで自分のことをじっくりと考えるようなことはなかった。

渋沢栄一翁は、たくさんの企業をおこした偉大な人であったが、いつも自分のことよりもみんなの幸せを願っていたという。自分の中にも、そんなふう

に相手を思える心があるのだろうか。

私の頭の中に、辛い練習を仲間と一緒に励まし合

って乗り越えてきたいろいろな瞬間が浮かんで

きた。苦しいときはいつも誰かが声をかけてくれた。

私だって、友達にアドバイスしたり、ともにうまく

なりたいと願ったりし合いながら、練習してきたは

ずだ。一年生の時の典子は、それほどプレーで目立

つことはなかったが、筋トレや走り込みなど黙々と

こなしていた。そういえば、練習の準備や道具の片

付けなど、手を抜いたことはなかったと思う。私だ

って純粋にバレーが好きで、うまくなりたい、自分

を高めたいと、自主練習だつてずっと続けてきた。

けんかかもしれないけど、全員で同じ目標に向かってこ

こまでやってきたはずなのだ。

あれから五か月たったが、自分の中の何かが少し変わった気がしている。バレー部の仲間と汗を流すことができるようになり、最後の大会にレギュラーとして出場することもできた。今私が目指している高校の校舎には「至誠」という言葉が掲げられている。あの渋沢栄一翁の直筆の額で、学校説明会の時に見つけたものだ。その時校訓についてのお話があり、「至誠」という言葉の意味は「まごころのことであり、常に誠実な心をもって、人や物事に当たれ」というものであることを知った。その二文字からは、渋沢栄一翁の深い思いが伝わってくるような気がした。一度きりの人生を、夢や希望を持ち、お互いを大切に思えるような生き方ができたらすてきなと思う。これからの自分の人生はまだ見えないけれど、今は第一希望の高校への進学がかなうように、勉強を頑張ろうと思う。

小さな一歩 (社会参画)

夏休みの県大会を終え、大好きだったサッカー部も引退を迎えた隼太。頑張り始めた受験勉強の合間の気分転換と、高校入学後もサッカー部で活躍したいという思いから、夏休みを機に朝晩のランニングを始めた。体力維持を兼ねて、二学期が始まっても継続して頑張っている。

そんなある日の朝、ランニングコースの途中で、新しい手作りの看板を見つけた。それは、「地域清掃参加者募集」というものだった。ボランティア活動にも興味があり、学校では三年間奉仕委員を務め、以前から勉強より体を



動かすことのほうが好きな隼太は、立ち止まって内容を確認した。

地域清掃参加者募集!

連絡先 〇〇〇

日時 十月五日(土) 午前八時から

活動内容 清水川土手の草刈り

青淵公園周辺の除草・ゴミ拾い

皆さんの力で、清水川沿いと青淵公園を美しく! 多くの方の御参加を、お待ちしております。

十月七日からは、中間試験がある。少し迷ったが、勉強ばかりの毎日に少し嫌気がさしていたこともあり、「これなら僕にもできそうだし、参加してみようか。ちようど気晴らしにもなるし……。」と思った。

その日の夕食後、確かに説得は難関かもしれないと思いつながら、両親にボランティアに参加することについて話をしてみた。すると母親からは、

「テストの前にボランティアなんて。勉強したくない口実じゃないの。あなたは今、それどころではな

いでしよう！」

と当然のごとく大反対されてしまった。

しばらく黙っていた父親が、

「ボランティアに参加したいという気持ちは大切だし、親としても嬉しい。しかし、母さんの心配ももつともだ。母さんの言うとおり、勉強しなくてよい口実ではないだろうね。やるべきことはきちんとやり、社会に貢献できるのなら、それは素晴らしいことだが、どうなんだい。」

と、助け船を出してくれた。

「大丈夫。試験勉強も計画的にやってみせるよ。」

と、思わず答えたが、正直、痛いところをつかれたという思いもあった。しかし、とりあえず参加の了解は取り付けることができた。

そして十月五日。ボランティア当日。

初めての自主的なボランティアへの参加に、不安と期待を感じながら、指定された集場所へ行ってみた。すると、そこには、昨年卒業したサッカー部の宏樹先輩も来ていた。久しぶりに会った先輩は、日に焼けた笑顔

で話しかけてきた。

「隼太、久しぶり。お前も参加するのか。初めてだろう？」

「はい、この間、あそこの看板を見て、ちよつとやってみようかな、と思つて。先輩がいてよかったです。よろしくお願いします。」

「そうか。それじゃ、一緒に頑張ろう。」

代表者の山木さんから、活動の詳細な指示と分担の説明を受けてから、早速作業が始まった。

初めて参加した隼太は、宏樹先輩と一緒に公園の除草作業に取り組むことになった。地域の人を中心に、多くのボランティアの方々が集まって、青空の下、作業が始まった。みんな、汗をかきながら、分担に従い、楽しそうに仕事をしている。

はじめは楽そうな仕事だな、と思つて作業を進めていたがだんだん苦しくなってきた。今まで公園の草に関心をもったり、誰がきれに草を刈っているのかなどと考えたりすることはなかった。日差しはまぶしく汗が噴き出てきた。ちよつとテストが気になってきた。こんなに体力を消耗しちゃったらテスト勉強に響い

ちやうんじやないかな、やっぱりボランティアに参加するんじゃないかななど、という気持ち膨らんできた。これで成績が悪ければ、母に何て言われるか……。あれこれ考えていると、草を刈っている手が止まりがちになっていった。

そんな僕の様子を見ていた宏樹先輩は、作業をしなから僕に話しかけてきた。

「中三の時、総合

的な学習の時に

『尾高惇忠』につ

いて調べたんだ。

渋沢栄一翁にも、

大きな影響を与え

た人だって聞いて、

調べてみようかな、

と思って。調べて

いくうちに、本当

に社会の発展に尽

くした人だったん

だ、ということがわかって、とても感銘を受けたよ。



こんな近くに、すごい人がいたんだなって。」

渋沢栄一翁のことを勉強したときに、そんな名前の人がいたな、と思い出したが、それ以上のことはほとんど知らなかった。先輩はさらに続けた。

「尾高惇忠は渋沢栄一翁のいとこで富岡製糸場の初代場長だったんだけど、富岡製糸場のために誠意を尽くした人だったんだって。特に工女の教育には力を入れたんだ。富岡製糸場が完成した当時、外国の風習への誤解から、働く工女が集まらなかったんだそう。そんなとき初代の工場長の尾高惇忠は、自分の娘である勇を、工女第一号として採用することで、その誤解を解いたんだ。その結果、多くの工女を採用することができた。最愛の娘を、家から離れて住み込みで働かせる決断をした惇忠もすごいし、その父親の思いを受け止めて、わずか十四歳で自ら家を出て働くことを決意した勇もすごいと思った。それからだよ。こんなふうに時間を見つけて活動に参加するようになったのは。」

先輩は照れたように笑った。

先輩の言葉が、隼太の心に残った。なぜか止まりがちになっていた草をむしる手に、力が入った。その後

も黙々と作業を進めた。

尾高惇忠は、なぜそこまで富岡製糸場に全身全霊を傾けたのだろう。なぜそれほど社会のことを考えたのだろう。

草だらけだった川の土手や公園がすっかりきれいになり、参加者の顔に汗がしたたる。秋風が汗ばんだ肌に心地よい。たくさん草やゴミがトラックに積み込まれ、作業は終了となった。

あいさつを終えた山木さんが穏やかな笑顔で近づいてきた。

「ありがとうございます。最後まで真剣に協力してくれて。君たちのような若者がこういう活動に参加してくれるのはとても嬉しいし、頼もしいよ。最近の若者はマナーがなっていないとか、自己中心的だとか言われているけど、決してそんなことはないと思うんだ。これからの社会を作るのはこれからの人たちだからな。大いに期待しているんだよ。」

宏樹先輩が答えた。

「ありがとうございます。僕たちにできることは、まだ少ないですけど、これからも頑張りたいと思います」

す。」

先輩に促され、隼太も山木さんに向かって小さく頷いた。ほんの少しだけれど、隼太の中で何かが確かに芽生えた気がした。

こんなすがすがしい気持ち
は久しぶりだ。社会のため
なんて大それたことを考えたこ

とはないけど、自分にも何かできることはあるかもしれない。そんなことを考えながら、家路についた。

母は、「泥だらけね。でもなんだかうれしそうな顔しているわね。いいことでもあったの。」と隼太を迎えた。隼太は「行つてよかったよ。」と答え、母が何か言う前に、「中間試験も精一杯がんばるから。」と笑顔を見せた。



深谷の煉瓦は国の宝

く郷土のために力を尽くした葦塚直次郎く

一

葦塚直次郎は、今から二〇〇年近く前に生まれまして。現在の深谷市明戸の出身です。

明治時代になってまもなく、政府は富岡に官営工場を設立する計画を立てました。現在、世界遺産に登録されている富岡製糸場です。建設の責任者となったのは、同じく深谷出身の尾高惇忠という人物でした。惇忠は、直次郎のことを、親分肌で面倒見の良く、自ら進んで物事に取り組む人であると知っていました。そのため、工場の建設に大量に必要な資材の調達は、直次郎をおいてほかにはないと最初から決めていました。こうして、直次郎は国家的大事業を任せられることになったのです。

二

直次郎は悩んでいました。新しい工場には、これまでの日本の建物とは違い、煉瓦が大量に必要でした。しかし、外国から煉瓦を輸入することは経済的に困難でした。煉瓦という言葉は聞いたことがあっても、実際に煉瓦を焼いたことがある人はいませんでした。

そこで直次郎は考えました。（こうなったら煉瓦を自分たちで焼くしかない。そうだ。深谷には優秀な瓦職人がたくさんいる。彼らの力があれば、まだ造ったことのない煉瓦を大量に造ることもきっとできるはずだ。）

直次郎は地元深谷の瓦職人たちに協力を願いました。すると、

「煉瓦？ そんなものをなぜ瓦職人の俺たちが造らなくちゃならねえんだ？ そもそも、聞いたことはあるが、見たことはねえからなあ。」

難しそうな顔で答えた職人に直次郎は説得を続けました。直次郎の手元にあったのは、フランス人のブリュナーが持ってきた数個の煉瓦でした。直次郎はブリ

ユナーに、

「フランスでは、こんなこんにやくみたいなものが屋根に乗っているのですか。」

と聞いたそうです。それほど、煉瓦は当時の日本では馴染みのないものでした。

「これが富岡の工場を造るのにどうしても必要なんだ。

私は、深谷の瓦職人たちの技術を信じている。なんとか力を貸してもらえないだろうか。」

「そこまで言われたら仕方がない。よしつ、瓦も煉瓦も同じ土から造る物だ。瓦の技術を生かして煉瓦造りをやってみようじゃないか。」



こうして直次郎と職人たちは煉瓦造りに挑むことになったのです。

三

直次郎は瓦職人たちと、一度焼いては話し合い、話し合ってはまた焼いたのですが、なかなか思うようなものはできませんでした。

「富岡の工場の建設はこの煉瓦造りにかかっている。国を豊かにするためにも、我々はここで諦めるわけにはいかない。深谷の職人の誇りを見せてやろうじゃないか。」

直次郎は焦る思いを押さえ、共に働く職人たちを励ましました。その度に、頑張る気持ちたちが皆の中に沸いてくるのでした。そして、ある時、参考にしていた煉瓦を砕き、水に溶かして成分を調べてみると、瓦には含まれていない細かな砂が含まれていることがわかりました。何度も砂と土の量、焼くときの時間や温度を調節し、とうとうブリュナーが持ってきてくれた煉瓦よりも立派な煉瓦を造ることができたのです。

明治五年、富岡製糸場は見事完成しました。現在でも直次郎たちの焼いた煉瓦を製糸場の壁に見ることができます。

四

それから数年後。明治十九年。深谷出身の栄一翁は深谷に煉瓦工場を建設しようと考えました。栄一は、深谷の郊外にある上敷免という土地に注目し、ここに煉瓦工場を設立しようと思ったのです。この一帯は江戸時代から瓦造りが盛んな土地であり、煉瓦造りに必要な豊かな粘土質の土壌があつたのです。一方で、上敷免には水田が少なく、みんな畑を耕して暮らしていました。煉瓦の元土を調達しつつ、彼らの暮らしも豊かにしたいと、栄一は考えました。

そして、栄一は直次郎に煉瓦用の土の調達を依頼しました。栄一の思いに共感した直次郎は、その地域に住む人々に栄一の思いを伝えながら説得に当たりました。

「ぜひこの地域の粘土を煉瓦造りに使わせて欲しいのです。」

「話はわかったが、煉瓦造りは俺たちにとっては何の得にもならないじゃないか。」

煉瓦は地域や社会を発展させるための宝。直次郎は

諦めませんでした。



「煉瓦用の土を無償でもらい受ける代わりに、畑を水田にさせてもらえないでしょうか。」

人々の表情が変わり始めました。

「それに、用水路の建設も援助します。米ができれば、みなさんの生活はさらに豊かになります。」

直次郎は続けました。

「これから先、この国の西洋建築はますます盛んにな

ります。深谷の煉瓦が広まれば、この地域もきつと潤うでしょう。」

直次郎の熱心な説得により、地域の人々の協力を得ることができました。現在も、深谷には煉瓦用の土をとって、その跡にできた水田が多く残っています。

五

こうした直次郎の努力に支えられ、明治二十一年、株主を募り、資本金を集めた栄一は、最新の設備を備えた日本初の機械式煉瓦工場を操業させました。その後、注文がくるようになると、栄一は煉瓦を東京方面へ大量に輸送するために、深谷駅と工場の間に専用鉄道を造ります。専用鉄道が開業したのは明治二十八年七月。ちょうど日清戦争が終わり日本に建築ブームが到来し、煉瓦の需要が一気に増えました。深谷の工場で作った煉瓦は、東京駅を代表とする多くの西洋建築に使われました。

明治から大正にかけて、深谷の煉瓦は、日本の近代化を支える重要な国の宝となったのです。



令和二年三月 渋沢栄一翁ころざし読本編集協力委員会改訂

日本体育教育の発展に貢献した郷土の先人 起き上がりこぼし「野口源三郎」



「野口源三郎遺稿集」より

ぼくの父は、中学から大学まで陸上競技部に所属し長距離走の選手であった。その影響もあって、ぼくもこの三年間陸上競技に頑張^{がんば}ってきた。そのお陰もあり、今年、埼玉県の「体育優良生徒表彰」をいただくことになった。その話をすると、父は大変に喜んでくれた。そして、「これから頑張るように」と言い、この地域の先人、「起き上がりこぼし『野口源三郎』を目指せ！」と声をかけてくれた。野口源三郎、どのような人物なんだろう。父は、嬉しそうに野口源三郎の話をしてくれた。

野口源三郎は、一八八八^{やつもと}（明治二十一）年八月二十四日、埼玉県大里郡八基村^{あぎ}字横瀬村（現深谷市横瀬）で、丸橋家の長男として生まれた。しかし、早くに母が亡くなったこともあり、三歳の時、母方の

親戚である野口家の養子（三男）となった。

源三郎は、埼玉県師範学校（現在の埼玉大学）に入学し、一生懸命勉学^{はげ}に励み卒業後は地元岡部小学校の教師となった。その後、東京高等師範学校（現在の筑波大学）に進学し、陸上競技と出合うのである。

東京高等師範学校に進学した源三郎はマラソンに関しては素人であったが、当時では珍しい校内マラソン大会に参加し、春季大会で六位、秋季大会で二位と好成績を残し、校長の嘉納^{かのうじごろう}治五郎に大絶賛された。当時、嘉納は、日本がオリンピックに参加^{ほんそう}することを熱望しており、その実現に向けて奔走^{ほんそう}しているとあった。嘉納に「ストックホルムオリンピックのマラソン競技の予選会に挑戦してみたらどうだ。」と強く勧められた源三郎は、自信をもつて出場したものの、結果は四位、オリンピック代表には選ばれなかった。しかし、マラソン競技の厳しさを痛感した源三郎は、負けたことにかえって陸上競技の魅力に引き込まれていった。



「野口源三郎遺稿集」より

東京高等師範学校を卒業した源三郎は、長野県の松本中学校の教師になり、体育・スポーツの振興のため、陸上競技部を^{ほっそく}発足させ、熱心に指導に当たった。指導者として、効果的な練習方法を追究する傍ら、源三郎自身も陸上選手として、自分に合った^{かたわ}競技種目を模索し続けていた。

ある日、源三郎は偶然一冊の陸上競技の本を手にした。マーフィーの著書『陸上競技の練習法』である。「これだ」と思った源三郎は、その本を手がかりに、「こうやったらどうか」、「うまくいかないのはどこに原因があるんだ」と、走り方、投げ方、跳び方を読んで試す、試しては読むを繰り返しながら、ああでもない、こうでもない、と手探りで練習に取り組んだ。徐々に^{じょじょ}棒高跳びや十種競技（百

メートル、百メートルハードル、走り幅跳び、棒高跳び、砲丸投げ、円盤投げなど）に練習の成果が表れてきた。

一九一七（大正六）年、第五回日本陸上選手権「棒高跳び」三メートル（日本記録）で優勝。
同年、第三回極東選手権競技大会「十種競技」でも優勝。



ハワイに立ち寄った選手団 「スポーツ八十年史」より
上段左から4番目が野口源三郎

源三郎は、一九二〇（大正九）年、ついに十種競技の選手としてアントワープオリンピックに出場した。日本選手団の主将を務め、開会式では旗手を任された。しかし、記録は、十四人中十二位と振るわず、世界と日本の技術・体力の差をまざまざと感じ取り、天を仰いだ。

選手を引退した源三郎は、「これから世界に通用する選手を育てる」と決心して、研究者・指導者としての挑戦を始めた。源三郎は、これまで外国人選手の練習を間近に見

てきた経験と、欧米のスポーツ界を視察して得た知識を生かした、理論と実践に裏打ちされた研究をもとに全国を回り陸上競技の指導にあたった。一方で、論文や図書の執筆に力を入れ、その数は二百四十四編に及んでいる。

源三郎は、その後、極東選手権大会やオリンピックで日本選手団の監督を務めるほか、東京教育大学や埼玉大学の教授として活躍し、七十九歳で亡くなるまで生涯をかけて、体育スポーツの発展に理論と実践の両面から尽力し続けたのである。源三郎の人生は、正に起き上がりこぼしの一生であった。

毎年お正月の二日、三日にかけて行われる「箱根駅伝」は、お正月の風物詩ふうぶつしとなっている。多くの人々が、東京から箱根・芦ノ湖までの往復百キロメートルの道のりを、一本のタスキをつなぎながら、走り競い合う学生の姿に、「今年も頑張ろう」と新たな気持ちを抱かせてもらっている。この「箱根駅伝」は、野口源三郎の発案がきっかけで誕生した

のである。

ぼくは父の話を聞きながら、この地域の先人に思いを馳はせていた。今から百年以上前にこの地域で生まれ、育ち、陸上競技に取り組んでいた野口源三郎。今、自分もこの地域で生まれ陸上競技に取り組んでいる。同じような思いや願いがあったのだろうか、それとも全く違うのだろうか。起き上がりこぼしのように常に前向きにたくましく生きた先人。地域の人たちは、この地域の先人をどのように受け止めているのだろうか。父が励ましてくれたように「野口源三郎を目指せ」、「起き上がりこぼしであれ」と思っているのだろうか。

ぼくは、三年間取り組んできた陸上競技を思い返しながら、野口源三郎が頑張っている姿を想像した。ぼくの中に野口源三郎はいるのだろうか。これから陸上競技を続けていこうと思った。



令和二年三月 渋沢栄一翁こころざし読本編集協力委員会作成

富岡製糸場の建設・運営にかかわった「深谷の三偉人」

深谷市からは、渋沢栄一翁や生沢クノ女史など多くの先人が出ています。深谷の先人たちのことを知り、理解し、「ふるさと深谷」のことを学んでいきましょう。



渋沢栄一
[渋沢栄一記念館所蔵]



荻塚直次郎
[個人所蔵]



尾高惇忠
[渋沢栄一記念館所蔵]



【設立当時の富岡製糸場】 【群馬県立歴史博物館所蔵】

※ 平成26年6月、世界文化遺産に登録された富岡製糸場の設立には、現在の深谷市出身の、渋沢栄一、尾高惇忠、荻塚直次郎が、さまざまな形で尽力しました。

「近代日本資本主義経済の父と言われた栄一」、「栄一の師であり、初代富岡製糸場長となった惇忠」、「富岡製糸場建設に力を尽くした直次郎」、深谷市では三偉人の顕彰に努めています。